

人に寄り添う宗教文化——折口信夫と万葉集と

上野 誠（國學院大學教授）

- 明治維新は王政復古から出発し、西欧化をモデルとして近代化に向かった。

現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。「いや、何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま！〕」とわたしに言明したものがあるかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと「われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです」と断言しました。なかには、そんな質問に戸惑いの苦笑をうかべていましたが、わたしが本心から興味をもっていることに気がついて、ようやく態度を改めるものもありました。

（トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記（上）』岩波書店、一九八八年、初版一九七九年、エルヴィン・ベルツの一八四九年〔明治九年〕の日記の一文）

※日本のウチとソト、崇拝か排斥か。

- 明治中期に入ると、日本を説明する必要が出てくる。

内村鑑三（1861－1930）／『代表的日本人』1894 年

新渡戸稲造（1862－1933）／『武士道』1899 年

岡倉天心（1863－1913）／『茶の本』1906 年

- 日本を説明する知の巨人

鈴木大拙（1870－1966）仏教

和辻哲郎（1889－1960）倫理学

柳田國男（1875－1962）民俗学

折口信夫（1887－1953）国文学、民俗学

- 折口信夫

- ① 独特の発生論から日本の古典を俯瞰する国文学研究
- ② 神観念や他界観を通じて日本人の内奥を見通した民俗学研究
- ③ 身体の日本美とその伝承のありよう探る芸能研究
- ④ 日本語の特性に肉薄しようとした国語学研究
- ⑤ 日本人の倫理や道德の背後にある宗教的感性を探索する宗教研究
- ⑥ 日本人のそれも庶民の宗教的エネルギーを民俗学の方法でとらえようとした神道研究
- ⑦ 古典を踏まえつつ歌表現のありようを摸索した詩歌の創作

- ⑧ 自らの学問的実感を物語として表現する小説
- ⑨ さりげない行動や言葉の背後にある思惟をとらえる珠玉の評論

■ 折口信夫の学問の特性（１）

常に日本文化の総体を考える。

茶道、書道、かぶき、能、政治、宗教

■ 折口信夫の学問の特性（２）

生活重視、実体重視、体で体感する。

■ 折口信夫の学問の特性（３）

創作者として生き続ける。歌人、詩人

近代短歌の巨人、釈迢空。

■ 折口信夫の学問の特性（４）

反権力、性のマイノリティー、反エリート主義

文学報国会事件（1943 年、アラヒトガミ、満州国皇帝溥儀、久米正雄、右翼）

内務省「戦時緊急措置法に関する識者懇談会」事件（1945 年 7 月 26 日、食糧増産、増産しても供出、耕作意欲が起きない、吉植庄亮）

■ グローバルな社会

地域や国家への崇拜／排斥

グローバルスタンダードへの崇拜／排斥

敗戦／国家主義的知性の敗北

■ バランス感覚

① 山上憶良（660？－733？）漢字、儒教、仏教、律令を学んだ知識人。仏教者だが、遣唐使だけは日本の神に祈る（ウチとソト）。

② 左傾化した歴史学／歴史小説

③ 和魂漢才、菅原道真（845－903）

④ 海軍とカレーと肉じゃが

■ 折口信夫の問い

① 脚下照顧の学問

② 常に総体を見る

③ 文化は生活そのものである